

## インドシナ旅日記-5 「森本右近太夫の祇園精舎」

17世紀前半に森本右近太夫一房という人がいました。生国は分かりませんがお父さんが森本儀太夫という加藤清正の重臣でした。5,200石取りで清正が肥後に入国した時、現在の熊本県の南端水俣市に近い津奈木町に城を構えていたそうです。1611年に清正が没し、父親儀太夫も翌年に没すると、清正没後の家中の内紛に嫌気がさしたのか肥後を去り、肥前松浦藩に出仕したことになっています。晩年は海外に行っていたことを隠しつつ、京都で隠遁生活を送り、そのまま没しています。

この森本右近太夫一房が1632年に祇園精舎に巡礼して、仏像4体を収めてきたと語っているのです。その時の祇園精舎の精密な平面図も、彼から直接聞き取った絵師が書き残していました。1635年に鎖国令が出ています。彼が松浦藩に出仕していたことと、当時まだ朱印船貿易が許されていたことを考えると、彼についての事績は信憑性が高いということになります。



もともとは遺跡の全てを覆っていた漆塗の上にかかれた墨書きですが、長い年月とともにとても肉眼では判読できない状態になっていました。



森本右近太夫の墨書きも言ってみれば、アンコール遺跡にたくさんある落書きのひとつでしかないのですが、これはこれで立派な世界遺産を構成する資料になっています。

祇園精舎は日本では「平家物語」の冒頭に登場することで有名ですが、お釈迦様が説法を行った場所で、お釈迦様が世中に存在した5つの寺院(天竺五精舎)の1つです。インドのウッタール・プラデーシュ州シュラーヴァステーイー県に、現在では基礎部分のみが発掘保存されています。

ところが森本右近太夫が祇園精舎にたどり着いたと感激しながら、

漆塗りで飾られた石造りの柱に墨書きをした後はアンコール・ワットの回廊の柱にあるのです。つまり彼がたどり着き祇園精舎と勘違いした壮大な寺院が実はアンコール・ワットだったのです。

13世紀に建造された当時のアンコール・ワットは当時の王城(サンスクリット語でアンコール)であり、ヒンドゥー教の寺院(クメール語でワット)でした。その後(1618年)隣国アユタヤからの圧迫によって王城はプノンペン(の近くのウドン)に遷都されており、さらに国教もヒンドゥー教から仏教になり、アンコール・ワットも仏教寺院でした。遷都した後とは言え当時のアンコール・ワットは石造りの柱や梁の全てが漆で赤く塗られてい

たのですから、その大きさと言ひ、きらびやかさと言ひ、祇園精舎と間違えるのも無理からぬのかも知れません。



頭部だけ盗まれた仏像もあります。

残念ながら森本右近太夫の墨書は、ガイドが指さしてくれても何と書いてあるのか肉眼では判別できないほど傷んでいます。砂岩の上に塗られた漆もはげていますし、その後も何重にも落書きがなされているのです。ただ、まだ保存状態が良かった時に全文が解読されています。彼が奉納したという4体の仏像は行方不明ですが、彼の仏像に限らず、17~19世紀の暗黒時代からカンボジア内戦終結までの長い長い混乱期に盗まれたり破壊された遺物は数知れません。

興味深いのは森本右近太夫の当時、プノンペンがカンボジア王都の外港になっていて、日本人町も形成されていたということです。当時の外航船は木造船でした。木造船にとって最も恐ろしい外敵は「フナクイムシ」という二枚貝の一種で、放っておくと船材の中に侵入して穴だらけにしてしまいます。ただフナクイムシは淡水につけると死滅します。大航海時代の外港の多くが河口や川を少し遡った場所にあったのはそのためだったのです。ポルトガルのリスボンやポルト、スペインのセビーリヤ、イギリスのロンドンなど例を挙げるのには事欠きません。同じ時代のカンボジアの交易港がメコン川を遡ったプノンペンにあったということももうなずけるのです。



この壮麗な寺院がもとはヒンドゥー教寺院だったことを物語る仏像です。光背部分がヒンドゥー教の守り神ナーガ（蛇）だったのをそのまま利用したようです。



遺跡は今も修復作業が続けられています。日本のJICAの援助によって、日本の文化財保存技術が多用されていました。

そのプノンペンの日本人町ではトンレサップを遡った奥地の密林の中に祇園精舎があるとうわさされているのを聞きつけた森本右近太夫が、それならば巡礼してみようと思立ったのでしょう。当時の日本人のインド(天竺)の位置関係に関する知識からすれば、九州から見れば西のベトナムのホイアンから、さらに西に位置しているプノンペンのさらに西にあるという石造りの壮麗な寺院を祇園精舎と勘違いしても無理からぬのではないのでしょうか。

ただここで一つ疑問が出てきました。彼の父親、儀太夫一久(墨書では一吉)の没年です。儀太夫一久は1512年に亡くなっているはずなのですが、

息子である右近太夫一房のアンコール・ワットの墨書きでは、1532年当時に摂津の国池田(現在の大阪府池田市)で存命していることになっているのです。右近太夫一房は次男で長男の一友は加藤家二十四将の一人として、一揆鎮圧などに勇名を上げ、肥後藩主細川氏に召し抱えられているのですが、二人の父親一久(一吉?)のこの20年のブランクが何なのか気になるところです。

森本右近太夫の墨書きは下記のように描かれていたそうですが、今となっては石柱の劣化と共に歴史の彼方へと消えていくようです。

寛永九年正月初而此所来

生国日本／肥州之住人藤原之朝臣森本右近太夫／一房

御堂心為千里之海上渡

一念／之儀念生々世々娑婆寿生之思清者也為

其仏像四躰立奉者也

摂州津池田之住人森本儀太夫

右実名一吉善魂道仙士為娑婆

是書物也

尾州之国名谷之都後室其

老母亡魂明信大姉為後世是

書物也

寛永九年正月卅日

(大意)

寛永九年正月初めてここに来る

生国は日本。肥州の住人藤原朝臣森本右近太夫一房

御堂を志し数千里の海上を渡り

一念を念じ世々娑婆浮世の思いを清めるために

ここに仏四体を奉るものなり

摂州池田の住人森本儀太夫

実名一吉善根道仙士の娑婆(現世利益)のため

これを書くものなり

尾州名古屋出身の母明信大姉の冥福を祈るため

これを書くものなり

寛永九年正月三十日